



巻頭言

「コロナ禍と東日本大震災10年目のはざまの中で希望という名の光を！」

日本学校教育相談学会 宮城県支部副理事長 千葉 久美子

会報「きずな」第16号の発刊おめでとうございます。発刊に当たり労をお取りくださった広報委員会の皆様はじめ、快く寄稿してくださった会員の皆様に心から感謝を申し上げます。また、東日本大震災から10年目という節目の年に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という衝撃的な出来事の対応に日々ご尽力いただいている会員の皆様に衷心から敬意を表します。



コロナ禍により学会の活動が著しく制限された中、「きずな」の発行も休刊せざるを得ない状況になりましたが、「東日本大震災から10年」は宮城県支部にとって深い意味を持つ年でもありました。また、新型コロナウイルス感染症による一斉休校は学校現場にとって大きくその在り方を転換すべき出来事にもなりました。広報委員会ではこの2点についての特集を組んで記録に残したいという熱い思いのもと、第16号が発刊されました。重ねて高橋晃子先生はじめ仙台ブロックの広報委員会の皆様に衷心より御礼申し上げます。

コロナ感染症予防での休校措置が解除された6月1日。ランドセルを背負い、足早に学校に向かう子ども達にすれ違った朝の出来事が今でも忘れられません。東日本大震災後の学校再開の日の光景と重なり、急に胸が熱くなり、涙が溢れてくるのを止めることができませんでした。全く予期しない涙でした。輝くような笑顔いっぱいの子供達から、学校は、「日常」であり、「夢や希望そして未来」へのシンボルだと改めて感じました。「震災から10年とコロナ禍」のはざままで沢山の対応をしている大人たちへ、子ども達の笑顔は何にも代えることができない「希望という名の光」が確かに見えていると信じます。

さて、平成15年の支部設立以来、歴代理事長先生のご指導の下、支部やブロックごとに多領域にわたる研修会や事例研修等の実践研修・活動を進めてまいりましたが、来年度には創立20年を迎えようとしています。発足当時からこれまで一貫として、「教育相談の実践者」としての仲間が常にそばにいますが、会員一人一人の大きな力になっていることを実感します。だからこそこれからの魅力ある学会宮城支部の今後の在り方・方向性をしっかりと見極め、次の世代に引き継ぐことを念頭に進めていくことが大きな課題になっています。「ここに来れば仲間がいる」「共に考えてくれる仲間がいる」「自分は一人じゃない」と会員全員が思えるような、「きずな」を紡ぎ続ける支部であることを心から願い、巻頭言といたします。

(石巻高校書道部パフォーマンス・希望の光)



東日本大震災から10年を振り返って

「東日本大震災から10年を振り返って」 宮城県支部理事 中里 和裕

平成31年8月9日（金）・10日（土）・11日（日）に宮城県支部が初めて主管して開催された「日本学校教育相談学会第31回総会・研究大会（宮城大会）」は、地方大会としては異例の300名を超える参加者を得て、大成功の内に幕を閉じました。

大会の開催に当たり、私たちが掲げたテーマは、「信頼と心の響きあいを大切にした学校教育相談」でした。そして、このテーマこそ、平成23年3月11日に発災した東日本大震災によって中止のやむなきに至った、「日本学校教育相談学会第23回総会・研究大会（宮城大会）」（同年8月に開催予定でした）に向けて、当時の川島克支部理事長の下、宮城県支部会員が一丸となって取り組んでいたテーマでした。23回大会の開催案内では、このテーマについて、「子供たちとの関わり合いの中で、最も大切にしたいものは「信頼関係」です。そして、常に子供の気持ちに関心を持ち、「心の響きあい」を大切にした相談活動を展開したいものです。」と記しました。そこで、震災後7年を経て開催された31回大会では、副題を「～東日本大震災を越えて私たちがめざすもの～」とし、開催案内には次のように記しました。「子供との関わりの中で、最も大切にしたいものは「信頼関係」です。そして今、私たちは、震災以来7年間の学校教育相談活動をとおして、普段の何気ない毎日の中で、子供との信頼関係を基に、常に子供の心に寄り添い、「心の響きあい」を大切にした相談活動を展開することこそが、大きな災害をも乗り越える力となるものと確信しています。」

震災後10年を振り返ってみて、やはり全ての学校教育活動の原点はここにあると、改めて思います。これからも子供たちとの「信頼関係」と「心の響きあい」を大切に、教育相談活動に取り組んで行きたいと思います。

「大震災から10年を経て思う」 宮城県支部理事 渡辺 仁

大震災直後の4月から、海の無い町の中学3年生の学年主任兼生徒指導主事を務めた。親の会社が津波で流されて営業終了。その混乱で奔走する親の注目を浴びたくて、何度も狂言で怪我をしたように装う女子生徒。放射能の風評被害で苦しみ、後に家族全員で忽然と姿を消した男子生徒。このように、教育相談が必要とされる生徒と、教育相談の範疇を超えた生徒が混在していた当時だった。大きな亀裂が入ったため、校舎が使用できなくなり、体育館で全校の授業を行った。全学年が単学級であったことも若干手伝い、学年の境目に移動黒板や移動掲示板を置いただけの授業展開だったが、ものすごく集中できた授業になった。非常事態であることを子どもながらに感じてのことだったと思う。やがて近隣の中学校に移転して、教室を間借りしての授業を行えるようになった。5月に予定していた修学旅行は秋に実施できた。生き残った体育館で部活動を行い、文化祭も、閉校記念式典も卒業式も行うことができた。当時、改めて不安を増大させる単語を慎み、不安な物音をたてないように留意し、たくさんの雑談を生徒と行い、対話の時間を多く確保するように心がけた。その姿勢は子どもを通して保護者にも地域にも伝わり、心の安定や心のケアに大きく作用したと認められた。

学校教育相談学会で多くの研修を受けてきたが、「子どもに何をしてあげられるのか」という初心の気持ちを忘れずにいる時に、研修したことが生きてくるし、応用できるものなのだと思っながら感じている。その4年後、大きな被害があった気仙沼市の中学校に赴任した。校庭が全て仮設住宅だった。皆さんとても明るく元気で前向きに生活していたが、じっくり話を聞くと、やはり教育相談の知見がとても必要とされていた。当然である。

私たちを包んでいる〈困難さ〉について考える

宮城県支部理事 藤坂 雄

私自身もまた10年間勤務した4階の教室から海が見える学校から、4月に学校の周りは田園風景の学校に異動した。〈あの日〉から10年を経て、被災者であったとしても、それぞれが勤務していた場所は異なる。一昨年、担当した教育実習生は当時小学6年生だった。彼もまた震災によって転校を余儀なくされ、様々な出会いを通して教職の道を進むことを決意したと語っていた。子どもへの対応の難しさも複雑になり、加えて子どもの育ちの背景に大きな影響を与えている震災に関する情報も学校は把握しにくい状況にある。問題行動の根底に幼少期の愛着の歪みがあるというアセスメントにたどり着くことが困難なケースも少なくない。

節目の年になるはずであった年は、ウィルスに翻弄される一年となった。コロナ禍において、職員室で震災の話題になることがある。「震災を乗り越えた私たちだから、今回も英知を結集して乗り越えていこう。」というメッセージも多い。その明るさは、弱音を吐けない風土を醸成していることが懸念される。休校中の児童を思って教職員は献身的に学習保障の準備をする。一見、美しいエピソードのように思えるものの、最善の手立てを見出すことができない現場にとって実感と納得を伴わない努力が、指導の困難さにつながっている様子も散見する。そして、この状況は一部地域のみに限った光景ではなくなってきている。復旧・復興という共有ビジョンがあった〈あの日〉以降とは大きく異なる。

私たちは、コロナ禍において東日本大震災の経験を生かすことはできないのだろうか。限られた時間と教育環境の制約の中で、何を大切にしていくのかという議論を通して、何を捨て、何を大切にするのか、協働を通じたそれが実感と納得を伴うものであり、そういう教職員集団のチームビルディングを構築することができたなら、教職員の困難さも薄れていくように感じている。

「 困難な時こそ仲間と共に！ 」

宮城県支部理事 鈴木 順子

宮城のみならず国難ともいえる未曾有の震災から10年、延期されていた教育相談学会宮城大会を開催することができたこと本当に感無量でした。実行委員会として活動を始めると、次々と課題がでてきて「本当に大会ができるの？」と悩み、相談と無理なお願いを重ねて何とか当日を迎えることができました。当日も予期せぬ事態やトラブルが発生！先生方の助けを頂き、日程を無事終えることができほっとしたのが昨日のこのように鮮明に思い出されます。「災害は忘れた頃にやってくる」、一昨年の台風19号では仙南地方全体が大きな被害を受けました。現在スクールカウンセラーとして勤務している丸森町では大規模崩落や家屋流出など大規模な被害があり、現在なお仮設住宅にお住まいの方々も多数おられます。自然災害で住民の皆さんも学校関係者の皆さんも大変な毎日を過ごしているところに、世界規模での新型コロナ感染症の追い打ち、まだまだ気を抜くことはできそうにありません。特に見えない敵との戦いを余儀なくされている医療関係の皆さん、行政関係の皆さんそして学校関係の皆さん、緊張感に押しつぶされそうな毎日を過ごされていることと思います。

様々な行事や研修会が中止や制限を受けることになりました。学会の研修会や総会も残念ながら中止せざるを得ない状況が続いておりました。こんな時だからこそ仲間に会い悩みを語り合いたい。どうすれば以前の様な日常が戻って来るのか？と考えていたところ、リモートでの理事会、総会開催が決定。スキル不足もあり「画面での会議はどうなの？」と抵抗感いっぱいでしたが、やってみるとリモートでも何とかなるものです。しっかりとした皆さ

んのご意見を拝聴し、心が通い合った気がしました。自分自身もフォローされていると大変心強く感じました。でも実際対面してお話をしたいというのが本音です。いつかまた直接皆さんにお会い出来る日を心待ちにしております。どうぞ会員の皆様お身体を大切に、災害もコロナ禍も乗り切りましょう。

10年を経て、語り掛けてくる声

宮城県支部事務局 西川 洋平

生徒にこのような声を掛けられました。

「災害によってつらい思いをしている人たちがいます。私たちが何か力になれないでしょうか。学校で募金することはできますか。私一人ではなく、みんなで…」

本校は学年あたり約160人という規模です。受験して入学する生徒は、入学後、ほとんど顔を知らない同級生たちの中に入っていくという現実と向き合うこととなります。この生徒もそんな現実と向き合いながら生活していたうちの一人でした。

長期休み直前の出来事でしたから、募金の期間は長期休みの前日のみとし、全校をあげてではなく、私の担当学年のみという、小規模な募金活動でした。募金前日に、その生徒は各クラスの学級委員と緊張感の中で直前に打ち合わせを行いました。学級委員に促され教室に入り、同級生に向けて呼び掛けを行い、教室を後にする。これらを学年すべてのクラスで行いました。

当日、その生徒が自作した募金箱には、たくさんの思いが詰められました。

こうして「何か力になれないか」という思いが、その生徒と同級生をつなぎ、被災地につながっていきました。私はその生徒の中に、この世の光をみた気がします。

のちに気付いたのですが、その生徒の自宅は沿岸部の市町村にありました。その生徒は過去に、何度も何度も募金活動を企画したけれど、なかなか実現せずに、今日まで過ごしてきたそうです。この件が、東日本大震災との関わりがあるのかどうか私にはわかりません。直接、その生徒に聞いたこともありません。あくまで、私個人が勝手に感じているに過ぎないことです。ただ、10年を経て、私たちに語り掛けてくる声を、生徒から届けられた気がした出来事でした。

コロナ禍と教育相談

今こそ「心の密」

宮城県支部理事長 渡辺 美貴

「黙って、静かに食べましょう」「おしゃべりはだめですよ」

先日訪問した、白石市内のある小学校で、黙々と給食を食べる2年生の子どもたちの姿を目の当たりにして愕然としました。友達と談笑し、つい箸が止まってしまうほど楽しいはずの給食タイム。黙々と給食を食べる小学校2年生なんて見たことはありません。いやがおうにも子どもたちも災厄の渦中にあることを認識させられます。失って初めて大切なことだったと気づくものの何と多いことか。あらためて「普通の生活」が子どもたちにとってとても貴重だったのだと気づかされます。子どもの自殺増加のニュースは、子どもたちにとって新型コロナウイルス感染という見えない敵に対する不安と緊張が我々が想像するよりはるかに強いのだという警告です。大人社会の心の不安定さが、子どもたちの心の体力をじわじわと低下させているのです。

感染防止のため、新しい生活様式の中で常識になりつつある「密」の徹底回避。しかし子どもたちの心の体力が低下している今、これまで以上に私たちは、子どもたちやその家族と

の「心の密」に努めなくてはなりません。変わっていくべきニーズと、変わってはいけない不易なニーズをしっかりと見極め、それぞれの立場で縁あって巡り合った一人一人の子どもたちと「心の密」を紡いでいかななくてはなりません。

私の住む白石市ではコロナ感染者及びその家族を差別するような言動を諷める条例が制定されました。こんな条例が必要な現実に愕然とします。先の見通せない日々はまだまだ続きそうです。自身の健康に留意し、子どもたちの健やかな成長を願い頑張りましょう。

コロナ禍の手習いはじめ

宮城県支部副理事長 吉川 邦彦

昨年このコロナ禍の中、2回目の国家公認心理師試験を受験した。よく勉強したと思える一方で、もっと学ぶべきだったと思える所もある。使った参考書や問題集を列挙すると、①公認心理師必携「精神医療・臨床心理の知識と技法」医学書院…事例問題解法の参考。レベルが高く、神経心理検査や付録略語集を熟読。②有斐閣アルマ「心理統計学の基礎」…基礎といっても難解。仮説検定・因子分析・構造方程式モデリング・標準偏回帰係数等々もう一度説明せよと言われても無理。③一発合格「公認心理師対策テキスト&予想問題集」ナツメ社…これはお薦め。私が通信添削を受けた所の塾長がこれを元に手を加えたテキストを、受験生に暗記させている。ぜひとも覚え、問題解きもやるとよい。④翔泳社「公認心理師完全合格問題集 2020」…国試の過去問もあるがオリジナル問題も。所々うまくまとめている図表やグラフがあり覚えるのに便利。⑤秀和システム「実力養成科目別練習問題+本試験3回分公認心理師試験直前対策 2020 版」…オリジナル問題には、正答の理由が難解なものも。国試の過去問が試験そのままの形で載っており、模擬受験訓練に役立つ。⑥有斐閣「公認心理師エッセンシャルズ」第2版…合格した先輩からの薦め。あまり利用せず。⑦日本評論社「公認心理師試験の問題と解説」…学会講習会で薦められたが、⑥同様。⑧辰巳法律研究所「公認心理師過去問詳解 2019 試験」…公認心理師資格を持つ大学准教授に薦められ、大いに役立ったもの。⑨同研究所「公認心理師1問3点！事例問題の解き方 part II」…同研究所(京都コムニタス)は解説に？と思うものはあるが、秀逸。得点源として絶対お薦め。公認心理師という資格を頂いたが、私自身は以前と何ら変わらない日々である。資格も大切だが、困難を抱えた小中学生の立場に立ち、日々の相談活動を淡々と継続できること、これがやはり相談員としては一番大切なのだといまさらながら思っている。

コロナ禍と教育相談～教育現場に透明マスクを～

宮城県支部副理事長 石川 健

暑い夏でもマスクを着けてカウンセリングに来る子どもたち。

私はコロナ禍での生活が始まるまでは「マスク着用の有無」を「心の元気度」を測るバロメーターの一つにしていました。

しかし、この1年半は新型コロナウイルスからの感染防止のために、いつでもどこでも、そして誰でもがマスク着用の時代が来てしまいました。

コロナ禍の今はマスク着用での面談。マスク越しではお互いの気持ちを交換することがとても難しいと感じています。悩んでいる子どもと思いを共有するためには顔の表情を読み取りながらのコミュニケーション作りは欠かせないからです。

そこで、私は、先日口元の見える透明マスクを購入し、それを着用して面談に臨んでみました。そうしたことにより、心なしか子どもたちに笑顔が増えてきた様に思いました。

過日、京都大学の明和政子教授が「保育者のマスク着用は子どもを育てていく上で心配な

ことがある。」とラジオで話されていました。

カウンセリング現場だけでなく保育や学校教育の現場では毎日の口元を隠しての保育や指導についてどう考えているのでしょうか。

フランスでは、口の動きが見える透明プラスチック製の窓のついた特別マスクを幼児保育の現場や障害児学校に30万個配布したとのこと。

わが国でも「アベのマスク」配布と同様に、口元の見える特別な「透明マスク」を学校やスクール・カウンセリング現場等にあまねく配布してくれることを願っています。

コロナ禍での学校としての役割

宮城県支部理事 小山内 正諭

令和2年5月から分散登校が始まり、6月から通常の学校生活が始まりました。学校再開当初は欠席も無く順調にスタートできました。しかし、7月に入ると徐々に登校できない子どもが増えていきました。その子どもたちの特徴は、学校の駐車場までは来ることができるが、そこから動けないという子どもが多く車の中で「涙を流すばかりで、何も言わない状態」が続き、学校に来られない状態になっていきました。保護者からも学校でのトラブルや問題ではない。学校へ行かない理由が毎日変わり、保護者もどのように対応していいのかわからないという状態でした。そこで学校としては、保護者と子どもの気持ちを受け止め、気持ちに寄り添うことを最優先にしました。その後、関係機関との連携の提案や学習の保障等、長い目で対応していくことの必要性を確認していくことからスタートしました。保護者にとって先が見えることはプレッシャーを大きく軽減することになり、その気持ちの余裕が子どもたちを追い込むことなく、学校復帰へ向けての良い働き掛けへとつながっていくことになりました。徐々に子どもたちが動き出し、良い方向へと進んでいます。

また、コロナ感染症により休校期間の生活のリズムの乱れによる体調不良を訴える子どもが多いのが現実です。特に今年度は突然体調不良を訴え、体調が戻らない子どもは、そのいずれの子どもも「起立性調節障害」と診断を受けています。診断後は、体調に合わせた登校をさせ、徐々に学校生活に合わせられるようになってきています。今後もこのような子どもたちが増えていく可能性があると感じています。

コロナ禍と教育相談

宮城県支部理事 高橋 聡子

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による非常事態に、現任校では、生活のストレスや様々な不安を感じている児童生徒も少なからず見受けられている。緊急事態宣言が発せられたときには、外に出ることができず、スポーツも友達に会うこともできず、「ストレスをため込まないようにすること」、「新しい生活様式に慣れること」が、目下の課題であった。

この緊急事態に、少しでもストレスを軽減できる方法はないかと、これまで学会で学んだことを振り返りひもといてみた。「マインドフルネス呼吸法」は、呼吸に意識を向けて空気が出ていく、空気が入ってくる。ただそれだけに意識を向け、ソーシャルデスタンスに気を付けながらしばらく続けてみると、思いもよらずいろいろな事が頭をよぎることを再確認できた。また、「アンガーマネジメント」は、「怒りの感情のピークは6秒間と言われており、カッとしても6秒たてば、理性を介入することができる」こと。「マインドフルネス」「今この自分の感覚を大事にして過ごす」こと等、改めてすぐにでも役立つ方法を見付けることができた。早速、学級活動や朝や帰りの会で、ソーシャルデスタンスに気を付けながら適宜実践をしている。子どもたちの命を守るために、三密（密閉・密集・密接）を避けながら、「かかわらない」ことを中心とする「コロナ禍での教育相談」の在り方を探る毎日である。

昨年のコロナ感染症蔓延により、学校も長期にわたり休校となりました。NHK学園に通学している生徒は小学生の時から不登校であったり、高校に進学はしたものの思い描いていた高校生活とかけ離れている、またはいじめにあった等いろいろな事情を抱えたりしている生徒が殆どです。外出自粛であってもこれまでの生活と変わりなく過ごしていた生徒が多かったようでした。普段から人と接することが苦手な生徒が多いため家庭内で過ごし、インターネットの高校講座を見、教科書や学習書を読んで勉強しレポートを作成提出するという学習形態が身についていたためと思われまます。ただ、学校が休校になったためスクーリング計画を立て直すことになりましたが、体育のスクーリング会場が使えなくなり授業計画に困難を極めました。

生徒の相談で特徴的なことは、家族関係で悩んでいた生徒が外出自粛のため気分転換の外出ができず気持ちが落ち込んだり、家族の職場から感染者が出ない様きつく指導されていたため、外出を控えるよう強く言われたりした生徒もいたようです。また、オープンキャンパスに参加したいが関東の学校のため、感染が不安で行くべきか悩んでいるという生徒や、岩手の協力校在籍の親から、大阪に転居予定であったがコロナの影響で岩手にとどまることにした。レポートは提出しているがスクーリングに一度も出席できずにいるため進級、卒業が不安である等、コロナ感染に特化した相談が少なからずありました。

「コロナ禍と教育相談の役割」

令和2年の正月には、新型コロナウイルスがこれほどまでに社会に影響を与えるとは予想しておらず、3月2日からの臨時休業に学校現場は混乱した状況でした。

新年度になり、かろうじて始業式と入学式を行うことはできたものの、次の日から再度の臨時休業。5月後半に、分散登校ができるようになると、ようやく学校に生徒の笑顔と活気が戻ってきました。感染症対策として、マスクの着用はもちろん、給食も班を作らず前を向いたまま食べたり、グループ活動を制限したりと三密にならないための新しい生活様式がどの学校でも定着しました。その状況を見て、人とのかわりに密はつきものだったと改めて思った人は多かったと思います。楽しい会話をしながらの給食や友だちとのスキンシップもできず、マスクで相手の表情や感情を推し量ることが難しく感じた一年でした。

コロナの影響もあったと思いますが、不登校生徒の増加も気になりました。医療機関につなげたいが難航したケース、学業不振等から無気力になった子どもに親が強く言えないケース、SNSでの発言に親も学校も心配するケース、医療機関や関係相談員と連携しながら進めているケース等々、特に1年生に多かった点が特徴的でした。学校行事も例年通りにできない状況の中、人間関係をうまく築くことができず不安や悩みを抱えながら誰にも言えずに内にこもってしまう生徒もいたようです。小学校時代からの切れ目のない支援の大切さを痛感した年でもありました。このような状況だからこそ、心の健康や人とのつながりが大切です。本人はもちろん、親への支援の在り方、担任が一人で抱え込まないようにチームでどう取り組んでいくか等々、この学会で研鑽を積み、今後も生かしていきたいと思ひます。

臨時休業からの学校再開，そして1年が経過して

宮城県支部副理事長 神田 裕樹

昨年3月末に転勤し現在の学校に転勤することとなった。転任先の地域では感染者が出ており、今現在は、学校名が公表されているが、当初は地域に感染者が出ると学校に対して地域住民や保護者、マスコミからの問い合わせがあり、不要な詮索から児童を守ることが課題となった。次の課題は、2ヶ月の休業期間に子どもたちを家庭でどのように過ごさせるか、また学校が再開した時に備えてどう準備を進めていくかであった。休業中にクラス分けや担任名はメールで知らせ、家庭への連絡や家庭訪問、家庭学習の課題の配付等を行った。すでに配備されたタブレット端末が100台程度あり、高学年児童中心に「eラーニング」を使って課題を出し、課題に対して担任がコメントを送るといったやり取りもできた。しかし、貸し出せる数には限りがあり、家庭に児童が使えるパソコンやタブレットがあるかどうか、ネット環境が整っているか等の確認が必要となった。6月1日の再開から2週間は密を避け地区を二つに分けて隔日に登校させ、検温や消毒といった受け入れ態勢を整えていった。分散登校は、前年まで不登校傾向だった子どもたちがスムーズに登校するといった思わぬ結果ももたらした。学校再開からの1年で一番辛かったのは昨年の6年生に修学旅行に行けないことを告げた時だ。子どもたちを取り巻く環境はより厳しさを増しているように感じる。仕事が忙しくなり家庭を顧みない親、離婚、家庭内での喧嘩などの情報が続く。昨年、先生たちで工夫して作り上げた運動会を今年は5月に実施できた。未明までの雨であったが、朝早くの急な呼びかけにも関わらず大勢の保護者が校庭の整備に来てくれた。演技をする子どもたちのこぼれるような笑顔とそれを見守る保護者の姿。無理はできないが一歩ずつ前に進んでいこうと思った。

コロナ禍における学校経営

宮城県支部理事 高橋 豊

(はじめに)

令和2年度の学校は、3ヶ月に及ぶ長期休業を挟んでのスタートとなった。今までに経験したことのない長期の休みだったので、少なからず子どもたちへ心身の影響があった。今まで何ごともなく過ごしていた児童が登校しぶりを起こすなど、学校再開後しばらくは、細心の注意を払いながらの指導を行った。以下、本校での取組について紹介する。

(児童の心の不安解消のために)

新型コロナウイルスという目に見えない病気との闘いに、子どもたちの不安は計り知れなかった。そこで本校では、学校再開直前の臨時登校日に、全校児童を体育館に集めて、養護教諭から新型コロナウイルスについての保健指導を行った。どんな病気なのか、マスク着用の予防効果、手指消毒や手洗いの重要性など基本的な予防対策について指導した。そして、一番心配だったのは、万が一児童が感染した際に起こる「誹謗中傷」であった。その点については、「どんなに注意していても掛かりうる病気であること」、「もし感染してしまった児童に対しみんなで優しく接していくこと」など、理解を促すためにより丁寧な指導を行った。

(本校のコロナ対策について)

毎朝の昇降口での検温チェック、校内でのマスクの着用、手洗い手指消毒の徹底、換気の徹底、共有部分の消毒作業、密を避ける活動等、様々な場面で細心の注意を払いながらの活



動が続いている。また、町教育委員会の方針として、本人又は家族に風邪症状等が見られた場合は、出席停止扱いとし、水際対策に力を入れている。また、学校としてのコロナウイルス感染予防に関する対処方針をまとめたガイドラインを全家庭に配付するとともに学校ブログにも掲載し、家庭との連携を図っている。保護者も学校の方針をしっかりと理解し、ご協力をいただいている。



(コロナ禍での学校行事について)

昨年度は、1学期の運動会の中止、水泳活動の中止などあった。しかし、2学期以降は、感染対策を万全に取り修学旅行や宿泊体験学習の実施、学習発表会や持久走記録会は学年部の入れ替え制で実施した。また、入学式や卒業式も在校生が参加しないことや来賓や保護者の人数制限など、密をできるだけ避ける形での実施となった。今年度も、運動会や学習発表会などは学年部ごとの入替制で行うなど、細心の注意を払いながら実施する予定である。

(おわりに)

コロナウイルスの終息がなかなか見通せない中、制限が多い学校教育活動が続いている。

日々感染の不安を抱え、我慢を強いた学校生活の中で、子どもたちの健全な心の状態を維持することが大きな課題である。子どもたちの活躍の場が失われる中、「自己肯定感」「自己有用感」を醸成する活動を意図的に取り入れ、これからも子どもたちの心の健康を守っていききたい。

新会員紹介

日本学校教育相談学会 宮城県支部 新会員となって

宮城県立石巻支援学校 高橋 憂季実

令和2年4月より、千葉久美子先生にご紹介いただき、日本学校教育相談学会宮城県支部へ入会いたしました高橋憂季実と申します。

入会するきっかけとなったのは、令和元年8月に開催された「日本学校教育相談学会 第31回総会・研究大会 宮城大会」に参加させていただいたことです。宮城県支部の皆様が「信頼と心の響きあい」をテーマに、東日本大震災という未曾有の災害を乗り越えたからこそ伝えられたご発表から、たくさんのことを学ばせていただきました。

私自身、養護教諭として子どもたちと関わっている中で、「子どもたちの本当の気持ちを聴くこと、引き出すことができているだろうか」と不安に思うことも少なくありません。子どもたちを取り巻く人々や機関と協力して、子どもたちの気持ちに寄り添い、よりよい成長の手助けができるような実践や方法論を学びたいと思っております。

どうぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



各地区ブロックより

新型コロナウイルス感染症予防により活動休止

令和2年度 支部研修会報告

1 日本学校教育相談学会宮城県支部第18回総会

- 期 日 当初予定 令和2年8月22日(土)
- 紙面により開催 (令和2年9月)
- 書面議決(承認) ※全職員に総会資料を送付し、否決される方がいなかったため

事務局より

1 令和3年度の宮城県支部の活動予定

- (1) 支部第19回総会 令和3年5月15日(土) 10:00~(オンライン開催)
- (2) 役員会
 - (定例会)
 - 第1回理事会・会計監査
令和3年 4月29日(理事会:オンライン開催 会計監査:村田二小)
 - 学校カウンセラー宮城県支部推薦委員会(※本部の認定業務の状況を確認し、開催の有無を決定)
 - 第2回理事会
令和4年 2月末(会場:未定)
 - 臨時理事会(2回の支部研修会(8/21, 11/27)の前に開催)
- (3) 事務局
 - 令和3年度会員名簿発行
- (4) 各専門委員会
 - 1) 各専門委員会打合せ 令和3年5月15日(土) 総会終了後(オンライン開催)
 - 2) 各専門委員活動
 - 研修委員会
 - ① 第46回研修会 (令和3年 8月21日(土) 終日開催)
 - ② 第47回研修会 (令和3年11月27日(土) 午後開催)
 - ③ 研究発表会 (令和3年11月27日(土) 午前開催)
 - ※学校カウンセラー資格の必須条件(県以上での発表)となりますので、カウンセラー資格の取得を考えている方は、この機会を活用してください。
 - 広報委員会
 - ・支部会報16号の発行 (仙台ブロック)
 - ・支部会報17号の発行準備 (大河原ブロック)
 - 紀要作成委員会
 - ・紀要第8号の発行準備 (平成22年度以降の活動内容について)
- (5) 各ブロック(新型コロナウイルスの感染状況を見極めながら活動)
- (6) 学校カウンセラー部会
 - 第6回総会・研修会の開催(令和3年10月16日(土))

2 日本学校教育相談学会宮城県支部第46回・47回研修会

(1) 第46回研修会

- 期 日 令和3年8月21日(土)
- 会 場 ZOOMを使ったオンラインでの開催
- 内 容 「愛着にもとづく育ちの理解と支援」
- 講 師 小野 善郎 氏(和歌山県精神保健福祉センター所長)

(2) 第47回研修会

- 期 日 令和3年11月27日(土)
- 会 場 エルパーク仙台セミナーホール(予定)
- 内 容 「(仮)学校コミュニティと教育相談」
- 講 師 氏家 靖浩 氏(仙台大学教授)

※コロナウイルスの感染状況により、オンライン開催になる場合もあります。

お知らせとお願い

○宮城県支部ホームページの開設について

5月に支部会員相互の情報共有の場として、支部のホームページを立ち上げました。本ホームページでは、支部研修会やブロック研修会等の情報を得ることができたり、会員専用ページでは、各種データ(総会資料、研修会資料、会報、紀要等)を閲覧したりすることができます。ぜひ、ホームページをご活用いただきますようご案内いたします。



(URL) <http://jascg-miyagi.com/>

(会員専用ページ) ユーザー名 members パスワード miyagimembers

○メーリングリストへの登録お願い(再)

宮城県支部では既にメーリングリストによるメール配信を行っておりますが、学会メーリングリストの運用開始に合わせ、改めて配信先メールアドレスの確認をさせていただきたいと思っております。(既にご登録いただいている方も再度ご登録をお願いいたします。)

コロナウイルス感染拡大が止まらない中、今後もZOOMを活用した遠隔での会議や研修会の開催が予想されます。また、働き方改革が叫ばれる中、事務の負担軽減のためにも、今後は資料等もメール添付で送らせていただきたいと思いますと考えております。どうか、趣旨をご理解いただき、ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、準会員の皆様につきましては学会からのメール配信は行われませんが、正会員と同様に支部のメーリングリスト登録の確認をさせていただきたいと思っておりますので、下記の要領に従ってメールの送信をお願いいたします。(この機会にぜひ正会員となられることをお勧めいたします。申請フォームは学会HPにあり、会員1名の推薦で正会員となることができます。)

(登録方法)

「氏名、会員番号、配信希望のメールアドレス（データを添付できるアドレス）」のみを下記の支部受付用メールアドレスへご送信ください。

宮城県支部受付用メールアドレス mail@jascg-miyagi.com

- *会員番号が分からないときは下記担当にお問合せください。
- *送信の際は配信を希望するメールアドレスに誤りがないか、必ず確認してから送信してください。
- *職場のメールアドレスは不可とします。個人のメールアドレスで、PDF等の添付ファイルの閲覧が可能なアドレスとしてください。
- *宮城県支部のメーリングリストは Googlegroup を利用していますので、Gmail のアドレスでご登録いただくと、パソコン、スマホ双方での送受信及び添付ファイルの閲覧が可能になります。
- *携帯のアドレスをご希望の場合は、パソコンメールを受け取れる設定をお願いいたします。
- *お知らせいただいたメールアドレスは、学会本部事務局及び宮城県支部事務局で適切に管理し、会員へのメール配信以外に使用いたしません。また、個人情報の保護に努めますとともに、第三者への提供はいたしません。

(担当)

日本学校教育相談学会宮城県支部 事務局次長 高橋 豊（村田町立村田第二小学校勤務）
e-mail yummy0710@gmail.com 携帯 080-3190-7331



<編集後記>

令和3年3月に定年退職しました。5月の連休に、退職の挨拶状を発送したのですが、たくさんの知人友人から、手紙・はがき・メール・LINE が寄せられました。どれも心温まるお言葉に満ちていて、とても感激しています。可能な限りお返事を書いているところです。昨年からコロナ禍のなか、本当に寂しい思いをしていましたが、言葉の持つ力に勇気づけられたり、励まされたり、生きる意欲に繋がる体験でした。会員の皆様にとってこの「きずな」がエールとなっていくことを願っています。寄稿していただきました先生方に心より感謝申し上げます。

仙台ブロック 高橋 晃子